

催眠薬

太田 辨次郎

これは、あなたの告別式か、友人の方々によつて催されました翌日に、あなたの生前の唯一の御親友でした三浦さんをお訪ねして戴いたのです。

「それは有るとは有りますがね、……だつて、今さら死んだ者の寫眞を貰つても、誂らないじやないか」

わたしは、その日三浦さんをお訪ねすると、直ぐにこの寫眞の事をお願ひしたのでした、が、三浦さんは、まだわたしの言ふことを充分聞きともしないうちに、訝るやうなこわばつた微笑を泛べて、かう仰有りました。

「いゝわ。そんなことはありませんわ。だつて、わたしは長沼さんがお亡くなりなすつたからつてその儘打遣つて置くことは、何うしてもわたしの良心が許さないんですもの。それもね、長沼さんがわたしの看護をうけて、あの儘癒くなつて無事に御退院なすつたのなら、わたしは別段態々こんなことをあな

たに御願ひしなかつたかも知れません。けれども、わたしが今、無理でもこんなことを御願ひせずには
 られないのは寧ろ長沼さんがお亡くなりなすつたからなんですよ』

わたしはあなたのあの意外な急死とわたし自身のある行爲との間に、緊密の關係があることを臆氣な
 がら感知してゐながらも、それをそのまま打遣つておくといふことより起る自責の念と、死別の後、心
 の裡に生じた寂しい空虚を幾分なりとも満たしたいといふ望みとに支配されるまゝに辯解するやうな口
 調になつて、言ひ續けました。が、わたしの言葉の意味がはつきり了解出来なかつたと見えて、三浦さ
 んは暫く腑に落ちないやうな表情の乏しい顔をして、凝乎と考へに沈んでゐらつしやいました。餘り
 わたしが執拗く御願するので、倒頭これを出して下すつたのです。

これは、昨年の秋、あなたが××學校へお這入りになつて、直ぐにお撮りになつたのださうでござい
 ます。わたしが、病院で初めてお目に掛りました時の面影と異つて、一年前のあなたの姿は、見違へる
 程若々しい生氣に充ち満ちてゐます。

わたしは斯うしてこれを眺めてゐますと、これがたとへ、あの頃のあなたの面影そのままの現はれで
 ないにしても、たゞ浮々した、明るいあの頃の日々の幻影が、一種の懐しさを伴ふて、心頭に去來する
 のを息ぐるしいやうな喜びの念を以て感せずにはゐられません。

けれども、それはたゞ束の間のことに過ぎないのです。わたしは、かうしてこれを眺めてゐますと、
 心の底に潜んでゐるある怖ろしい過去の思ひ出が、わたしの魂を、かうした浮々した氣分の中から嫌膈いんやう
 なしにびきすり出して、懊惱と苦悶の波の逆巻いてゐる、深淵の中に投げ込まうとするのを、どうする

ことも出来ません。

——このふつくらとした頬のやんわりとした丸味を去つて、痛々しいまでに頬骨を高め、温味の溢れた潤んだ眼を静かに閉ぢて、眼窩の窪みに深い陰影を刻みつけ、その上、顔全面を蒼白くしたら、寫眞の中のこの顔が、あの怖ろしいあなたの蒼白硬直した、悽愴な死顔デス・マスクその儘のものとなつて茲に現はれてくるに違ひありません——かう考へると、わたしは急に全身の諸器官の機能を一時に取り去られたやうな、けだるさに似た惱ましい感覺を興ふる一種の恐怖が、全身の脈管といふ脈管の凡てに顛へてゐるのを覺えます。それは思ふも怖ろしい殺人犯人が法廷に立つた時、被害者の生前を思ひ浮べしむるに充分なものを、法官より見せつけられた殺那に覺ゆる、あの一種の恐怖の念に相違ありません。

それでも、わたしはまだこの寫眞から眼を去ることが出来ず、惹きつけられたやうに凝乎と寫眞の面を見詰めてゐます。と、今迄全身を取圍んでゐた恐怖の念が、息苦しいまでに固く身體を抱きすくめるやうな氣がして、全身が骨髓の中まで、電流にでも觸れたやうな氣味の悪い刺戟に襲はれます。さうしてその次の瞬間には、寫眞の中のあなたの姿の裏から、毒々しい惡魔の生あたたかい吐息のやうなものが、ぼんやりと浮び出てきて、わたしの心臓に鬱結してゐる血液を、矢鱈にかきたてます。すると、心臓から一時にごつと吐き出された血液が、血管を駆け廻つて、ごくごくと身體の隅々まで流れて行くのが、かうした落著かぬ錯雜した意識のうちにも、はつきりと聞きとれるやうな氣がします。がそれも、ほんの纒かの間で、かうして全身を狂奔して、捌け口のなくなつた血液が、聽て押し寄せるやうに、づきんづきんと頭にこみ上げてくると、意識そのものまでが、次第に濃い霧にでも被はれたやうに茫然と

なつてきます。と、今迄わたしの盲膜の上に瞭然と影を映してゐた、あなたの顔の眼や鼻の形が、次第にその影をうすらげて、遂にはその凡てのものが一緒になつてしまつて、全く白紙を見詰めてゐるやうな氣にさへなつてしまふのです。すると、わたしは疑乎とかうして坐つてゐながらも、身體の平衡を失ひさうな眩暈を感じます。恚うした臍氣な意識に、折々氣味の悪い恐怖の影が映ると、わたしは胸おちの邊りを、固い握拳が何かで衝かれてゐるやうな、胸苦しさを感じるのです。……

今、わたしの周圍には、次から次へと連續的に、色々な形を採つて現はれてくる、恐怖、疑惑、不安悔悟、懊惱といつたやうなものがごつちやになつて、濁流の混沌さを以て渦巻ひてゐます。疲れ切つたわたしの可弱い心は、一瞬間でも此等のために苦しめ噴まれてゐない時はありません。忘れようとしても忘れられぬ、怖ろしい過去の思ひ出が醸し出す恐怖の影が、嫌がるわたしの心を無理矢理に苦惱の境に引き摺り込んで、絶えず打擲の制裁を加へます。わたしの心は、どうにかしてその苦し味を遁れやうと焦ります。跳きます。

かうして、わたしは立つても居てもゐられないやうな、落着きのない感情に支配される自分をそこに見出します。けれども、それが何等の効なきを思ふ時、疑乎と、かうして座つてゐるより外はない意氣地の無い諦めを覺ゆるのです。

さうしたささやかな諦めの念は、兎もすれば抑制し難い衝動の働くまゝに、其處ら邊りを大聲を張り上げて、思ふ存分驅け廻り度いやうにさへ思はれる、落着のない身體をぐつと押へつけて、有繋に惱ましい追想の荆棘に掻きむしられて、痛々しくも鮮血を流してゐた心に、不確ながらも靜かな落着場を與へ

て呉れます。かうして打ち噴まれた心の動搖が、次第に静まつてくると、今迄心を壓してゐた凡ての惱みは、次第に幾らか樫かきつたいやうな感じの中に溶けて、心は自ら何時の間にか、その數々の惱みの蔭に潜んでゐる過去の出來事の跡を次から次へと臆氣に辿つて行きます、恰も、夢に見た影像のあとを趁ぶやうに。――

二

わたしが、あなたの御用をお務めするために、病院に参りましたのは、今から一ヶ月ばかり前の、まだ夏の名残りの十分に去りきらない、ほんたうに蒸暑いある夕方のことでした。

その日、わたしは立關で俥から下りると、あの薄暗い黒光りに光つた廣い廊下を、重い信玄袋を提げ小走りするやうにして控室の方に参りました。すると事務室の曲り角の所まで來ると、それまであなたに附添うてゐた星野さんにびつたりと出遇つたのです。

「まア、浦部さん、もういらしたの？………」

星野さんは、驚きと喜びの混同した、幾分寂しみを帯びた微笑を送りながら、可成り早口に言ひました。

「わゝ、もつと早く來る筈なんでしたけれど、つい遅くなして相済みません」

「いゝわ、そんなことはないわ、………ではね、暫く控室の方に待つて、頂戴な。私、ちよつと、事務室まで行くところなんですから………」

かう拾臺詞すてざりふをして、星野さんは病人とは思はれない程の快活さをもつて、やがて廊下の薄暗がりに白い姿を消しました。

わたしは直ぐにその足で控室へ参りました。夕闇が薄ぼんやりとした影を擴げてゐる室内には、誰も居ず極めてひっそり閑としてゐました。わたしは、信玄袋を扉ドアの近くに投げ出すやうに置くと、直ぐに汗ばんだ肌に涼を納れるため、庭に面した窓の近くに寄りました。かうして凝乎と庭の棕櫚の葉ゆれなごを眺めてゐますと、わたしの眼の前には、これからの自分の生活が色々な形や色彩を彩つて現はれてくるのでした。わたしの心には暗い影が雨雲のやうに蔽ひかぶさつてくることもあれば、思はず明るい微笑の影がほのかに頬にのぼるのを、おぼろげながら意識することさへもありました。

と、不意に、わたしの空想の糸は背後の扉の開く音にぶつたりと断ち切られて了りました。わたしは殆ど反射的に後を見かへると、そこに星野さんの華かな笑顔が薄暗がりに浮出てゐるのを認めました。

「ごうもお待遠さま。随分お待ちなすつたでせう……」

星野さんは窓闕まじきに片腕をついて、片足に全身の重味を支へるやうな格好になりながらかう言ひました
「いゝね、早かつたわ」

「さう、私、今ね、事務室ですつかり歸りの手續を済ましてきたところなの」

「さう、さう私、あなたの御見舞を後らして了つたわ、……あなた御病氣だつて言ふぢやアないの
一体どうおありなされるの？」

わたしは星野さんの病氣のことをすつかり忘れてゐたことに初めて氣付いてとりあへずその場のがれ

にかう言つたのでした。

「ね、有難うよ、別にたいしたこともないんですけど、またあの脚の病氣が出ちやつたのよ、でね、私、今度は、今迄のやうなうわつつらの治療では到底駄目だから、郷里くわにに歸つてすつかり療してくるつもりなの、……………ねね、すこしは長くかゝるでせうけれど。……………」

「さう、それはまた随分辛い目にお合ひなさるのね。私同情するわ」

「ありがたう。でもね、私の事より私の後あとは屹度お願ひしてよ」

「ね、大丈夫おひき受けするわ。——して、そのあなたのお受持ちだつたつて方はどんなお人に、」
わたしは、今まで待構まちゐてゐたい、質問しをの機會を見出したといふ風にかう言ひました。

「その方はね、まだお若い學生の方なのよ。二週間ばかり前から盲腸炎で入院してゐらつしやるの。それはね、随分無口で女のやうにおとなしい方よ。自分で話してゐらつしやるどころや、醫師方せんせいのお話によると、何でも少しは神經衰弱の氣味もあるとかいふことなの。その爲あんなに塞き込んでゐらつしやるのかも知れないけれど、私、あんなにおとなしい方は初めてよ。事に依つたら、お饒舌じやうりでお轉婆てんぱな私の方がよほご男のやうに見わるかも知れないわ、おほ……………」

星野さんは、かう言つて他愛もなく笑ひくつれました。がまた直ぐに語をついで

「でもね、それも多くは私達に對する時に限つてあんならしいのよ。よくお友達の方が、學校の放課後なんかにお見舞にゐらつしやるよ、そんな時なんか随分快活に話してゐらつしやるわ。それもね、若いお人に似ず女の事なんか滅多にお口になさらないのよ。でね、私、餘り妙だから、この間ね、ある機會

に、(あなた、女をお好きですか、お嫌ひですか)つて言つてやつたのよするかね、頬をぼつと娘つこのやうに紅くしてさ、(さうですね、まあ、當り障らずで嫌ひでもありませんね位にしておきますか)つて仰有つたの。私、その時のお顔を凝乎と見てゐると、何だか可愛いやうな可笑しいやうな何とも言へない氣分になつちやつたわ」

「まア、あなた、そんな不仕附なことを言つたのいくら男だつてそれは人の性格にもよることだし、あなたのやうに、そんな失禮なことを言ふ人もないものよ」

わたしは、まだ見ぬあなたを庇ひたいやうな氣持になつて、思はず斯う言つたのでした。

「それはさうと、私、あなたをその方におひき合せするから、今直ぐにいらつしやいな………」

星野さんは、立上るとかう言つてわたしを促しました。

わたしが星野さんに連れられて、あなたの病室に參りました時、あなたは、寢たまゝ窓の硝子戸を通しつゝ、琥珀色に暮れて行く空を凝乎と眺めてゐられました。

「長沼さん、お目醒めですか、……さう、ではね、私今愈々おいとましますから、どうぞおあとは御用心遊ばせ。——私のあとにはこの方がいらつしやいましたから、どうぞよろしく。」

星野さんは私の方を指すやうな手つきをしました。

「あ、さうでしたか。それは態々御苦勞でした。暫くの間御厄介になりますよ」

あなたは、ひきつたやうな寂しい微笑を泛べて、如何にも書生書生した口調でかう言ひながら、そつとわたしの方に顔を向けられました。この時、初めてわたしはあなたの顔を正視することが出来まし

た。

可成り濃くなつた夕闇の色と、薄暗い赤味を帯びた夕方の電燈の光との混交した、妙に鬱陶しい色の光をうけて、その時のあなたの顔は、よほど弱々しく見えました。けれども、薄闇の中にもはつきりとした輪廓を見せてゐるあなたの顔の中の、かすかな頬笑みの影さへほの見ゆる口元の、やんわりとした皮膚の伸縮、電燈の光を宿して、黒耀石のやうな輝きを帯びて見ゆる眼等は、昂奮に顫へてゐるわたしの視神経に、今迄嘗て知らなかつた、ぐつとわれとわが身を抱きすくめたいやうな氣分を興へました。あなたの顔全面から、そおつと湧き出でてくる生温い一種の氣體が、譬へばいどしい母親の乳房の甘い匂ひに凝乎と嗅ぎ入つてゐるやうな懐しさを伴うて、煙のやうにと言ふよりは寧ろ霧かなにかのやうにやんわりとわたしの全身を包んで、皮膚に滲入し心臓の奥底まで滲みこんで行くやうな氣がしました。

「私、浦部と申しますの、どうぞよろしく御願いたします」

わたしは何だかおちつかぬ心をじつと押へつけるやうな氣になつて、かう言ひながら軽く會釋して落付かぬ視線をあなたの方に投げました。とそのとき二人の視線が計らずも空間で行きあつたのを、わたしは、はつきりと感じました。わたしは不圖、自分の心の中をすつかり見透されたやうな、遣り場のない極悪さを感じて、それを押し隠すやうに、足元に目を落しました。

あなたと星野さんとは、馴々しい言葉つきで、わたしには全く關係の無い、恐らくあなた方二人の間になだつて必要もないらしい話を交してゐられました。その間、わたしは思ふともなく、恍惚うつろひと取り止めもない影を心の中で追ひながら、悪るい、それでゐて幾らか惱ましい氣分に浸つてゐました。折々、星

野さんの華かな笑ひ聲や、それに續いて起るあなたの笑聲を耳にすると、あなた達が斯くまで親しみ合つてゐられるのに對して、その奥には紛れもない嫉妬の影のほのめいてゐる名狀し難い不快の念さへ覺えました。

「では、これで失禮いたします。どうぞお大事に。……一日も早く御退院遊ばすやう御祈りしてゐますわ」

星野さんは、話の種が盡きたと見えて、室を立ち去りさうな様子を見せました。で、わたしも續いて去らうとしますと、それを抑へるやうに制しながら、

「あなたも出てゐらつしやるの？、まあいゝじやありませんか、もう今晚からあなたがこの室の女主人イシなんでももの、ほほ……」と言つて語尾を笑ひに紛らしました。わたしは斯うした皮肉な、擲揄ふやうな言葉を聞くと、耐へられないやうな不快さを覺えたのでしたが、でも、ある一方では、自分に媚びる襟つたいやうな一種の快感を味はつてゐました。

わたしは、申譯のやうな薄笑ひを以てこの言葉に報いながら、そつとあなたの方に目禮して、急いで部屋を出ました。

今までの單調な、無趣味な、そして職業的な、何等潤ひのない、たゞ機械的に行動するに過ぎなかつた生活にひきかへて、その翌日からのわたしの生活は、全く幸福な喜びに彩られた、華かなものとして續いて行きました。わたしの眼に觸れるもの耳に聞くもの、凡てが、それは、たとへ詰らぬ一瑣事、一

細物に過ぎなかつたにしても、かうした喜びのために、陶酔状態に陥つてゐたわたしの感能に觸れるとき、それ等はその醜惡や苦惱を除き去られた、清純な喜悅に充ちたものとして、言ひ知れぬ喜びの感じを與へたのでした。

實際、わたしは自分の身を犇々と襲ひくる、青春時代の凡ゆる悦樂と幸福とを一緒に集めたやうな、かうした喜びに眩惑して凡てのものをうち忘れ、たゞ何等の惱みを知らない、明るい世界を夢心地で彷徨してゐる自分を見出しました。もう、今自分の胸の中にしかどかき抱いてゐる美しい幻像を除いては何等わたしの意を煩さうとするものはありませんでした。わたしは凡てのものを忘却して、凝乎と「愛」の暖い胸に顔をうづめて、そのもの優しい胸の鼓動にきゝ入つては、心の底から湧き出てくるよろこびの吐息をもらしてゐました。

けれども、かうした喜びは、たゞ自分の胸のうちで捏ねあげた喜びであるに過ぎませんでした。勿論わたしは初めはそれ丈をもつてさへ、自分をこの上もない此世の幸福者と感じたことさへありました。けれども、段々時と日を経るにつれて、わたしはもうそれより以前のやうに力強い悦樂を感受することが出来なくなりました。わたしは更に一步進んで、胸の中の幻像の美しい言葉を耳にし、それに對して自分の言葉を洩らし得る境地を夢見ました。

それから、わたしは幾度か自發的に努力して、自分をその境地に立至らしめんと思ひました。がしかし、そんな事はわたしには到底出来さうにもないことを知らなければなりません。それは女性特有の一種の羞恥感念に束縛せられ制せられて能はなかつたのみならず、わたしはさうするには先天的に

あまりに繊弱な性質を持つてゐました。で自然、わたしはたゞ凝乎と苛立つ心を押えて、その自ら来る日を待つてゐるより外はなかつたのでした、が、それはまた斯うした場合、女性にとつて當然斯くあるべきものゝやうに思はれてならなかつたからでもありません。

しかしある場合には、わたしは自分の夢想するまゝに、自分がその境地に接近することを怖れましたそれは、空想と現實との間に介在する、矛盾の醜惡な姿に對せねばならないかも知れない自分を怖れたからでした。若し、女性の羞恥感念を無慙にも破棄して、微弱な力を揮つて斷ち切つた幕のかげに潜んでゐるその境地が、自分の期待を裏切るに十分なものであるばかりでなく、絶らんとした手からは突き離され、剩へ、冷かな嘲笑を罵詈の眼をもつて睨まれ、しごけなく姿を亂して、矛盾の醜惡な姿の前面に伏してゐるみじめな自分を思ふとき、わたしは今の状態がこのまゝ永久に續いて行けばいゝとさへ考へました。實際、その當時、幸福そのものゝ現はれのやうだつたわたしの周圍をめぐる凡ては、どこまでもよろこびに充たされて、何時もながら明るく輝いてゐましたから。

三

それから、かれこれ十日餘りも経つと、今までは可なり平穩な状態を持續してゐたあなたの病態が、急に掌をかへしたやうに、今迄にない險惡の色を帯びてきました。それまでいさへ余り口を利かないでふさぎ勝ちだつたあなたは、斯うなると終日すぐれない不快な顔をして、力ない溜息を洩らしたり、孱弱な身體を以て生れた身を託つやうなせつない事ばかりを言つてゐられました。わたしはそれを聞いて

あると、知らず識らずの間に自分までが惱ましい氣分になりて、長い間窮屈な寢台に横臥したまゝ、病苦に惱んでゐられるあなたに、心からの、殆ど肉身の愛にも等しいやうな、へだてのない憐憫の情を感じました。

けれども、弱々しいあなたの病身を驅つて、更に甚だしい苦惱の境に導いたのは、たゞ本來の病氣そのもの、面白くない経過のみではなくして、以前から可なりあなたを苦しめてゐた神經衰弱が更にその辛辣な毒手をのばし始めた事でした。醫者は回診の折毎に、絶対に氣分の安靜を求めらるやうに注意しましたが、それでもあなたの氣分は段々病的に落著きを失うてきて、それが身體に及ぼす悪影響は、外貌の衰へとなつて次第に露骨に現はれてきました。

あなたが、毎夜々々睡眠が出来ないで苦悶しはじめられたのは、あなたがお亡くなりなすつて二週間位前だつたかと記憶してゐます。夜眠れなかつたにしても、晝の間なりと睡眠が出来れば、それは幾分あなたの身體なり精神なりを安靜にするに役立つたかも知れません。けれども、あなたの場合にはそれが少しも出来ませんでした。夜は殆ど一睡も出来ないやうなひどい不眠症に罹つてゐながら、それで晝の間でさへ碌碌眠ることさへ出来なかつたので、身體の衰弱は日一日と加速度を以て増すのみでした。で、勿論醫者は、かうした不眠症の身體に及ぼす悪影響の大なるを恐れて、適量の催眠薬を與へたのですが、殆ど漫性まで進んでゐたあなたの病氣より起つたこの不眠症は、到底その位の薬で利目が現れ相にもありませんでした。

「どうして醫者はも少しのままで呉れないのか知ら。催眠薬を澤山のんで充分睡眠さへ出来れば、僕の

病氣位直ぐに治つて了ふんだがなア……。」

あなたはよく斯う言つては、醫者の處置に對して抱いてゐる不滿を洩らしたりしてゐられました。

けれども、醫者は仲々それを許して呉れませんでした。依然として適量として盛られた少量の薬は、何等の効を齎すことは出来ませんでした。かうして、あなたの不眠症が續くにつれて、身體は愈々見る影もないやうに衰れたばかりでなく、わたしは、あなたの心理状態に少からぬ變化の起りつゝあるのを臆氣ながら感知するやうになりました。今まであまり口を利かなかつあなたが、本性とは思はれない程理に合はないそぐはぐな事を言つたり爲たりせられたのでした。深夜寢静まつた折に、ごうかしてあなたの唸るやうな呻くやうな聲を聞くと、わたしは妖怪にでもとりつかれたやうに、ぞつとする悪感を氣味わるく全身に感じました。

「すこしでいゝからもつと餘計貰つて呉れませんか、ね、後生だから……。」

あなたは哀訴するやうな力ない眼をわたしの方にむけながら、よく斯う言つてわたしに迫られました。が、しかし、わたしはあなたのこの要求に對して、たゞ醫者の言をそのまゝお傳へして、その倒底出來ないことを申上げるより外に、何等爲すべき術すべを知りませんでした。けれども、わたしの心はたゞ其儘で落著くことは出来ませんでした。外面では斯うしてあなたの歎願に似た要求を拒否してゐながらも、内心では常に、わたしはごうかして今少し余計のませてあげたいといふ事を忘れたことはありませんでした。

さうかうするうちに又幾日か過ぎました。あなたの神經衰弱は、更に著しく顯はれてきた不眠症を伴

うて、一層悪徴候を示し始めました。其辛辣な悪影響の下に噴まれたあなたの精神は次第に平衡を失つて、あなたは殆ど半狂人さへ思はれる位、自意識を失つた行爲を示されることが屢々わたしの目に觸れるやうになりました。

その頃のある夜更けのことでした。わたしは、その時分では毎夜一時二時頃迄もあなたの側に起きてゐて看りしてゐたのですが、その夜も夜更けまで何時ものやうにお側に附いてゐました。が、つい連夜の疲労のために、重い臉をふせてうつらうつら微睡まごろみかけてゐますと、不意にあなたの起き上るやうな氣勢を感じて、わたしは殆ど本能的に目を醒ましました。見るとあなたは、寢臺の上に起き上つた上半身をわなわなと顫はせながら、血走つた眼をものごく虚空の何處かに見張つて、今にも飛び出し相なたゝならぬ姿勢を示してゐられました。

「はい！面倒くさい！……呉れなければ自分で取つて來るまでだ！」

かう言ひ切ると、あなたは丸で狂人のやうに身顫ひして、寢臺から床に飛び下りられたのです。わたしはそれが餘り意外の事だつたのと、自分の探るべき處置を即刻に決定するには、未だ假睡より充分醒めきらないわたしの意識はあまりにぼんやりしてゐたので、暫くはたゞ失神したやうな空虚な瞳孔を見張つて、そのなりゆきを傍觀するより外はありませんでした。が、愈々廊下に出づる扉に手をかけたあなたを見た時、わたしは無意識にその方にかけて寄りました。

「まあ……どうなさるおつもりなの？。熱もおありなさるのに、こんな夜更けに外に出るなんて……」
わたしはあなたの腕に縋つて切き込んで申しました。

「うるさいつたら、その手を離してお呉れ！……僕は催眠薬くすりを取つて来るんだ！」

あなたは荒々しい聲で投げつけるやうに斯う言つて、わたしの手を振りきると、さつと扉を開かれました。わたしは外に出やうとするあなたを無理に引止めやうと焦りましたが、狂人のやうに狂ひまわるあなたの力に及ばず、つい二三歩引き摺られるやうに扉の外に足を踏み出しました。けれども、わたしは自分の責任感にかられて、有るだけの力を絞つてあなたの身體を室の中に引き摺り込まうと努力しました。かうして可成り長いこと経つた後、わたしはやつとあなたを元通り寢臺に横たねることが出来ました。それからよほどの時間を経過しても、まだ何か譯の判らぬ譫言ばかり言ひながら、少しの間も身動きすることを止めなかつたあなたは、暫くすると半睡状態になつて、可成りの平靜な状態に復されました。

夜はもう余程更けてゐました。硝子戸一枚を距てた庭の草叢に降るやうにすだく蟲の音が、もの靜かな深夜の冷い空氣を顫はせながら、涙ぐましいやうな寂しさを伴うて襲うてきました。白い窓掛カドヅを透して洩れてくる、ほんやりとした蒼白い月の光は、あなたの寂しい横顔や眞白な寢具に、弱々しい色を帯びて流れてゐました。淡い月影をうけて、浮き出たやうに際立つて見える突出た頬骨、折々病的に起る窪んだ頬の痙攣、苦しい息づかひに微かに動いてゐる乾燥した唇——かうしたものを凝乎と眺めてゐますと、わたしの胸の底からは、ごうにかして救つて上げ度いといふ抑制しきれない隣憫の情が、もくもくこみ上げてくるのでした。

「うゝむ、苦しい……」かう言つてまた微かに眼を見開いたあなたは、ごこを見るときもなく眼球を凝

乎と見すねてゐられました。その顔は丸で死人のやうな生氣のない色と、斷末魔の生きもの、喘ぎとを
はつきりと顯はしてゐました。その顔を凝乎と眺めてゐると、私の頭の中に今迄全く思ひ設けなかつた
ある考へが濃い色でばつと浮んできました。わたしは不意に怖ろしいものに手を觸れたやうに、ぞつと
する身顛ひを感じました。わたしは、ごうにかしてその恐ろしい考へを、頭の中から拂ひ除かうと私か
に努力しました。が、それはしつこく頭の中にこびりついてなかなか去りさうにもありません。それご
ころか、遂に、(さうしたら、或はお救ひすることが出来るかも知れない)といふ感じさへ抱くやうにな
りました。

その時、またわたしはあなたの苦しさを唸り聲を耳にしました。その聲はわたしの胸に針を衝き刺
すやうに鋭い刺戟を與へました。その瞬間、わたしは敢てその考へを實行しようと、強い決心を致しま
した。

四

わたしは、直ぐに椅子を離れて、室の入口の扉ドアの横手にある箱の前に參りました。その箱の上には、
粉薬の袋だの、水薬の瓶、その他檢温器といつたやうなものが雜然と容つてゐる盆が一つ載つてゐまし
た。わたしは、その盆から催眠薬の容つてゐる薬袋をとると、直ぐにその中から四服の薬の包みを取り
出して、箱の直ぐ上の小窓から洩れてくる、廊下の薄暗い電燈の光りをたよりに、自分の腹はらの邊りまで
きてゐるその箱の上で、いちいちその包みを開いて、四服の中身を一緒にするために、別の紙に移しは

じめました。が、三服の中身を移して、その上更に四服目の中身をそれに加へようする時でした。わたしは、ぐつと引き止められるやうな衝動を感じて、さすがに鳥渡躊躇しました。わたしは、何故か斯うしたことが非常な悪事でもはたらいであるやうな気がして、言ひ知れぬ惱ましい思ひに強く胸を壓せられました。その時、わたしはまたあなたの苦し氣な吐息を背後にききました。わたしはそれに促されたやうに、思ひきつて第四服目の中身を更にさし加へると、もう何の猶豫もなく、樂飲みに湯を入れて、急いであなたの側に寄りました。

わたしは片手であなたの頭を押へながら、やつと紙の角から口の中に薬をいれてお湯を流し込むと、ほつと心の底から湧き出るやうな吐息を洩らしました。

それから暫くの間、あなたは喘ぐやうな唸り聲を發したり、足で蒲團を蹴上げたりして、倒底寢つかれさうにもない様子でした。兎もすれば、まだ藥の量が足りないなどと不平を洩らしたりしてゐられました。が、わたしは思ひ切つて多量に飲ませていたので、今夜こそは今に眠れるだらうと心待ちに待ちながら、椅子に寄つた儘時の到るのを待つてゐました。

それから餘程の時間を経過すると、あなたは何時とはなしに全くの睡眠状態に陥られました。今迄の苦しきやうな苦しき顔付にひきかへて、やすらかに、凝平と眠つてゐられるのを見ると、わたしは、何となくおちついた安慰の情の起るのを制することは出来ませんでした。この十數日以来絶えて接しなかつた安らかな寝顔を見ると、わたしはもう凡ての責任から解除されたやうな氣輕さを覺えて、空氣の抜けたゴム毬のやうに心がたるものを覺えました。それと同時に、今まで辛うじて抑へてゐた睡魔がひし

ひじと身を襲ふてきて、もう全く耐わきれないやうになつたので、床に蒲團を延べるとすぐにそのまゝ横になりました。暫くの間は、今先きまでの自分の行爲やその他色んな事が、ひつきりなしに頭に浮んできましたが、山の霧のやうにすんすん押し寄せてくる睡魔に驅り立てられて、それ等は何時とはなしに次第にその影をひそめて了ひました。

この數夜引續いて、殆ど名の附く程の睡眠をとることが出来なかつたためと、あなたの安らかな寝顔を見てからの心の緩みとで、わたしは、その夜は全く死んだやうになつてぐつすり眠ることが出来ました。

その翌朝、わたしが目を醒ました時には、清々しい朝の日光が、窓の硝子戸を洩れて窓掛越しに枕元の白壁に弱い光を投げてみました。熟睡の後の快い、それでゐて幾らか物ういやうな懈氣を全身に感じ、床の上につき直つたわたしは、座つた儘凝乎と寢臺の上のあなたを見遣りました。蒲團の裾の方を少し亂して、右手を投げ出すやうに眞白い上蒲團の上に置いて、安らかに眠つてゐられるあなたを見ると、わたしは常にないのんびりとした心のおちつきを感じました。

わたしはそれから直ぐに立ち上つて、寢間着のまゝで箱の上から検温器をとると、何時もの朝のやうに何氣なく寢臺の側に寄りました。わたしはそれをあなたの腋に挟むために、何の考へもなくそつと蒲團の端を上げました。と、その時、あなたの顔の上に落してゐたわたしの眼は、あなたの顔に今まで嘗て見なかつた無氣味な異變の起つてゐるのを認めること、殆ど本能的に二三度激しく瞬きました。熟睡の

後の、まだ充分醒めきらない臍氣な意識をかきたてるやうにして、わたしは鬼もすれば曇りがちになりさうな瞳を見張つて、尙凝乎と顔を見つめてゐました。と、今までぼんやりと官膜に映つてゐたあなたの顔の形や色が、初めて瞭然とわたしの意識に上つてきました。可成り高い體熱と昂奮の爲に、毎朝屹度ぼつと椒味のさしてゐたあなたの顔は、其顔は朝に限つて、妙に生氣のない丸で蠟細工のやうな蒼褪めた色を帯びて見えました。死んだ蚯蚓の肌のやうな色をした唇は、弾力を失つたやうに力なくかすかに開いて、その間から白い齒並が寂しく覗いてゐました。自分の思ひなしか、その唇は何時もよりは廣く開いてゐるやうにさへ思はれました。——その瞬間、わたしの頭の中を思ひ出しても薄氣味の悪い豫感がぼつと過ぎて行きました。と、わたしは、一時に全身に冷水をあびせ掛けられたやうにぞつとしましたが、またすぐに、(そんな事があつてなるものか、またそんな事のあり得よう筈さへない)と自ら自分の豫感を否定せずにはゐられませんでした。けれども、わたしの不安は段々胸を強く壓しはじめました。のみならず、わたしは、全身を何か數百の手で全く隙間もなく、ぐつと締めつけられてゐるやうな胸苦しい悪感に襲はれたのでした。わたしは、もう何を考へる餘裕もなく、無意識に蒲團を撥ねのけて、搔卷の上に置かれたあなたの手首をそつと握りました。と、その手首は丸で大理石の石像にでも觸れるやうな冷さを掌に與へました。あなたの手の冷い感觸が、わたしの胸に戰慄と恐怖の渦巻きを起しました。

「長沼さん、……………長沼さん、私の顔が見えますか?……………」

わたしは、尙それでも信じる事が出来ないで、戦き顛へる右手で、あなたの右肩を矢鱈無性に動搖

りながら、顔を耳に觸れんばかりにして、切りに呼び續けました。するとわたしはあなたの身體までが全く温味を失つて了つて、その下ユルセットでも扱ふやうに固くなつてゐるのに氣がつかしました。わたしはもう狂はんばかりになつて、切りにあなたの名を呼ひながら、(何うかしたらあなたは眼を開かれるだらう)といふやうな、漠然とした希望に浸つて矢鱈に身體を動揺しました。けれども、錆びついたやうに閉じた臉は仲々開きさうにもありませんでした。——「死」——わたしの胸は、この言葉の色々の形で現はした複雑したある豫感にどつと打たれました。わたしは投げ出されたやうに茫然として寢台の横に立つてゐますと、臍氣な意識の中を、影繪のやうに昨夜の出來事が過ぎて行きました。わたしは窒息するやうな胸苦しさを感じました。

と、わたしは何か自分の身體が雲にでも乗つてゐるやうにうかうかして、眼の前を薄いヴェールにでも被はれてゐるやうな氣になりました。凝乎と見詰めてゐるあなたの顔が、二三度ぐらぐらつと動いたかと思ふと、わたしは身體の平均を失つて、よろよろとすると、何か背後にゴム毬にでも觸れるやうな打撃を感じました。——その時、壁で背を打つたのに相違ありません——それで幾らか意識を回復するやうな氣がしましたが、またすぐに、眼の前の白壁や寢台が臍氣な影となつて、切りに動揺してゐるやうな氣がしました。すると、眼の前が急に眞暗になつて、何處から飛んできたとも判らない、ざらざらと輝いてゐる小さな赤い玉や青い玉を無數に持つた、霧のやうなものが眼の前で切りに動いてゐるやうでした。……………と、わたしの臍氣な意識は、何時とはなしに吸ひとられるやうにうすらいで行きました

あなたがお亡くなりなすつてから五日目に、街の外れの淨林寺で行はれた、告別式に参列して歸りしなのごとでした。

わたしは、たゞ一人寺の門を出ると、何故か直ぐに此儘、會の方へ足を運ぶのが心淋しい氣がしましたので、折から、夕陽の光をうけて、橙色に染め出されてゐた寺の長い白壁塀と、稻田の縁を限つてゐる小溝との間の、眞白に乾き切つた埃の道を野の方へ歩いて行きました。

鉛筆を薄い青色の紙の上になすりつけたやうな夕雲の影を宿した溝の水面には、土手の雜草の間からなよなよと伸びた野菊が、墨繪のやうにやさしい影を落してゐました。わたしは、見るともなくその水面を見やりながら、取り止めもない追想に浸つて歩きました。大勢の人々の一ぱい詰つた、狭い薄暗な本堂の中から遁れて、かうした物靜かな夕暮の大氣の中を、たゞ自分一人の小さな世界を作つて歩いてゐますと、頭の中を、色々の事が浮んだり消えたりして、惱ましい氣分を唆りました。

かうして一人緩かな歩を運んでゐますと、急に背後の方からわたしの名を呼んでゐるやうな氣がしました。わたしは、なかばその呼び主の位置をたしかめるやうな心になつて後を振り返りますと、思ひ掛けなくわたしの方に驅けで来る三浦さんの姿を認めました。

「やア……今さきね、あなたが本堂を出て行く處をちらと見たので、僕、急いで追驅けてきたんですよ」

三浦さんはやつとわたしに追付くと肩を並べて歩きながら、苦しうに息を大げさに呼吸してかう仰りました。

「まアさう、私ね、出て来る時に鳥渡あなたに御挨拶して来やうと思つたんですが、餘り大勢の先生方やお友達がいらしたので、何だか極りが悪いやうな氣がしてつい失禮いたしましたわ」

「いや決してそんなことは有りませんよ」と三浦さんは捜すやうな目色で、更めてわたしの顔を見ながら「してあなたは、今、こんな道を歩いてごちらへいらつしやるんですか？」

「ね、別に何處といふあてごもないんですけど、すこし野の方でも歩いて見度いやうな氣になりましたので……………」

「あ、さうでしたか、それは結構ですね、だが、もうお身體からだの方はそんな事をなすつてもいゝんですか」
「ね、もう自分だけはすつかりいゝやうな氣がいたしますの、今日なんか斯うして歩いてゐましても全く平氣なんですの、わたしは地に落してゐた視線をそのまゝにして言ひました。

「さうですか、それは早くよくつてよござんしたね」と三浦さんは何時ものやうに、元氣のいゝ口調で仰りました。「何しろあの日、長沼の急死の報に驚いて病院に驅付けると、あなた人事不省に陥られたと聞いてまた二度吃驚しましたよ。隣室の附添看護婦が、あなたが床ゆかの上に昏睡状態のまゝ打伏してゐるのを發見けて、今は廿三室に寝かしあるといふので行つて見ると、あなたは眼を閉ぢたまゝ丸で死人のやうな蒼褪めた顔をして寝てゐましたからね。僕、全く驚いちやつたですよ。」

「皆さんに色々御心配かけましてまことに相濟みません。……それよりも、私、何だか長沼さんに對し

て濟まないやうな氣がしてなりませんの。」

わたしは自分で思はずかう口走つたことに氣が付くと、急に痛い腫物にでも觸れたやうな氣がしました。

「濟まないつて、長沼の死んだことですか？」

「わー」

わたしは(長沼の死んだこと)と聞いて、已に三浦さんは、凡ての事情をみんな知つてゐらつしやるのではあるまいかと、強い不安に胸を打たれました、が、——内心ではその言葉を揉み消してしまいたいやうに思ひながらその場合の行きがかり上、わたしは、思はずかう言つてしまわずにはゐられませんでした。

「いや、もうその事は氣に掛けずにゐて下さい。あれもどうせかうなるべき運命を持つて生れたものと諦めるより外に爲方はありませんね。あなたがあつして親切に看護して下さつたのに、こんな事になつたんですから、もうどうせ助かる命はなかつたんでせうよ」

三浦さんの聲は、今迄にない感傷的な打沈んだ調子を帯びてゐました。がかうした三浦さんの、あの夜のわたしの行爲に關しては全く知らないやうな言葉をきくと、わたしはやつと安堵の胸をなでたばかりでなく、三浦さんの言葉そのものまでが、わたしの行爲とあなたの死との間に、何等の連絡のないことこの保証でもあるかのやうな氣さへして、急に氣強さに似た微かな安慰の情を覺えました。が、それもほんの一時の心の遊びにすぎませんでした。そして、直ぐその次の瞬間には、わたしの心はまた惱まし

い氣分に包まれてゐました。

——あなたがお亡くなりました翌日、その日は、わたしはまだ病院のガランとした空き病室の寢臺の上に寝てゐました。わたしは、すこし自分の氣分が回復するのを待つて、郷里にある星野さんに手紙を書きました。そして、あなたの意外な急死と、わたしのあの夜の處置との間にはたして密接な因果の關係があるか、それともその死は、あなた自身の精神作用なり、或は肉体作用なりの急變が自ら招致したものに於いて、訊き合せたのでした。星野さんからは、その翌日至急便で返事が參りました。そしてあなたの急死を聞いて嘘ではないかとばかり驚いたといふこと、わたしの大膽な處置には呆返つて了つたこと等を、女らしいデリケートな筆で長々と書いた後に、次のやうなことが書き記してありました。

……「モヒ」の作用は、或る適量を越えてこれを用ひますと、大脳の機能が全く消え失せて了つて覺醒しない睡眠を來し、人事不省に陥るものでございます。それが更に強くはたらきますと、遂には呼吸中樞も亦おかされて呼吸が全く止んでしまいます。そして死因が果して「モヒ」の中毒にあるか否かは、内臓や頭腦の解剖によつて勿論明かに判明すると思ひますが、さうでなくても、外に現はれた特殊の變化によつても知ることが出来ると思ひます。若し果して長沼さんの死因が、あなたが過量に飲ませた催眠藥の中に調劑してある「鹽酸モルヒネ」の中毒であるとするなら、病院の方は吃度何等かの方法でそれを知り得てゐる筈でございます。表向きに發表された死因が「急性腹膜炎」であり、殊にまた、あなたには私の話がなかつたからといつて、病院の方で「モヒ」の中毒に非すと斷定してゐるとも言へません。あなたは、まだ患者にお當りになるやうになつてから日が淺

いため、あまり御承知ないかも知れませんが、かうしたことはよくあることで、大きな聲では申されませんが、病院の方でもその信用に關するからなるべく發表しないやうにしてゐるものと思はれます……。

わたしはこれを読んで行くうち、一言一句がすきんすきんと針のやうに胸を刺すのを覺えました。張りさけるやうに眼を睜つて、息をもつかず讀み終つてたわたしは、寢台に臥したまゝ、暫く茫然として天井の何處かを見つめてゐました。——かうした記憶がその時、噛むやうな鋭さを以て心の底から起りました。わたしの心とはまた更に、暗い暗い影がさしました。わたしは疑乎と地面に視線を落したまゝ、時と所を忘れて心頭に去來するいろいろの思ひの影を趁ひながら無意識に、歩を運んで行きました。

「時にね、浦部さん、僕はあなたに是非一つ聞かせ度いことがあつて、熊々かうしてやつてきたんですかね……」

暫くして浦部さんは突然かう言つて、意味ありげな薄笑ひを瞳に泛べながら、じつとわたしの顔を覗き込むやうにしました。

「……………」深い思ひに沈んでゐたわたしの意識は、突然斯う呼びかけられても、咄嗟に言ふべき言葉を見出す余暇を有しませんでした。

「ね、浦部さん……………」三浦さんはまた追窮するやうに申されました。

「わ？……………」わたしはこの時初めて三浦さんの言葉に目覺めました。

「あなたに聞かせ度いことがあるつて云ふんですよ」

「私に？——まアあなたまつて、聞かせ度いこと、仰有るとごんなことですか知ら？」

「さア、ごんな事ですかね、ひとつ當てて見たら何うです？」

眞紅な夕陽をうけて紅味のさしてゐる三浦さんの頬が、微笑に崩れました。

「だつて、ぼんやりしたことを仰有つても、わかりつこありませんわ」

「それはね、あなたを屹度喜ばせることなんですよ」

「……………」

「わかりませんか？……………では申しますがね、長沼はね、……………あなたに戀してゐたんですよ」

「まア、あんなこと、御戲談ばかり……………」

思はずはつとして可成り急激にまたいたわたしの眼は三浦さんの顔に向ひましたが、待ちかまねるやうにこちらを見てゐた三浦さんの眼にぴつたり行き遭ふと、跳ねかへる様に、直ぐそのまゝ、地面に落ちました。

「いや決して戲談でも嘘でもないんですよ。これ此の通りちやんと証據があるんですから。」と、三浦さんは懐から入念に新聞紙に包んだ小さな四角い物を取り出しました。三浦さんの指の先で、二三度くるくると廻つた紙包の中からは、ころげるやうに見馴れぬ黒い革表紙の手帖が出てきました。

「これですよ、その証據といふのは」三浦さんはそれをわたしの目の前に突き出すやうにして申しました。

「それがどうしたと仰有るんですか」

「いや、この中のね、この一番初めの詩を見て御覧。その中には屹度あなたの心を動かす何物かど潜んでゐるに違ひありません」

わたしは、差し出された手帖を受取ると、妙に改まつた三浦さんの言葉に、追にどきめく胸の鼓動を感じながら、思はず歩みをとどめて、そつと開かれた紙面に眼を落しました。落著かぬ昂奮に顛へてゐる視線は、よろよろと二三度紙面をすべると「酷い^{せつ}笑ひ」といふ文字の上にやつと落つきました。

美しいものよ

輝いてゐるものよ

月夜の海の眞珠の瞳

日に透徹る卵の頬

苺がおまへの唇の上で惱ましい程熟れてゐる

ああ、私は寂しく求めてゐた

輝くおまへを求めてゐた

おまへの熱い胸の火が

(静かなおまへの看護の心が)

私の心臓に觸れてくる

ああ、しかし

おまへは遠くで笑つてゐる

星の高さで笑つてゐる

おお、耐へられぬ心の惱み

氷のやうな私の悶々

そして

美しくいおまへの頬は

暗い私の吐息の上に

何にも知らずと笑つてゐる

ああ、笑つてゐる、笑つてゐる。

わたしは、二三度読みかへすと、手帳を持つた手を自然に脇にたれて、また靜かに歩き出しました。詩といふものに、餘り豊富な知識を持たなかつた私は、この一篇から、それが有する意味と暗示の凡てを、即座に掬みとることは勿論出来ませんでした。が併し、わたしは、それを讀み終ると同時に、自分が今迄半信半疑であつた、自分に對する愛が、確かな事實であつたことを力づよく裏付けてくれる、或るものを見出したやうな氣がしましたのは事實でした。わたしは、今まで掴まんと焦つてゐたものを、やつと掴み得たやうな氣がしました。が併し、それは決してわたしに、歡びとか満足とかを與へて呉れるやうなものではありませんでした。それどころか、わたしは、そのため更に新し苦惱を加へられたやうなものでした。

(お前はお前を愛してゐる者を殺したのだ。お前に何の怨みも、にくしみも感じてゐない者を殺したのだ。)といふのが、その時、心の底のどこかでひびきました。すると、わたしは、何か鋭い刃物か何かで胸の中をわぐりまわされてゐるやうな胸苦しさを感じました。

けれども、わたしは、最初、慥うした怖ろしい結果を豫想しなかつたばかりではなく、寧ろ、自分は慥うしたら、苦しい肉体的の苦痛から、人間一人を救ひ出すことが出来るのだといふ、つよい意識を持つてあつた獨斷的な處置を採つたのでした。まるで、自意識を失つたやうな、狂的な、あなたのあつた態度に接して、ひどく昂奮してゐたあの時のわたしの心理には、慥かに大膽とでも名附け得る、ある特殊の感情が常より強くはたらきつゝあつたといふことは、拒むことの出来ない事實でした。けれども、その時、わたしは、(自分は今、人の生死を分つ立場に立つてゐる)などといふことをごうして意識してゐましたらう。

人を救はうと思つてしたことが、却つて人を殺すやうなことになつたのでした。苦惱から人を救ひ出すのだと思つてしたことも殺人といふ怖ろしい悪事をはたらいたことになつたのでした。

かうした考へに耽つてゐますと、煽り立てられるやうに神経が昂まるにつれて、全身をはげしくかけめぐる血潮が、カツと顔にこみ上げてきて、その赤い血潮が、顔の皮膚をつき破つて、ほとばしり出はすまいかと思はれる程でした。充血した眼は、死魚の眼のやうに、どこを見てもなく力なく見開いてゐました。わたしは、夢心地で、無意識に歩いてゐました。

「その手帖はね、長沼の病室の跡片付をやつてゐる時、蒲團の間から出てきたんですよ。氣分のいい時

なんかに、ひとりでこつそり感想や詩歌をなぐり書きしてゐたらしいんですね。僕はそれを見付けて、何氣なく開いて見ると最初に見つけたのがその詩なんでせう！。さすがに僕もいろいろ考へさせられましたね」

今まで黙つて歩いてゐた三浦さんは、わたしが物思はし氣な面持で歩いてゐるのを見てから仰有りました。が、惱ましい數々の思ひに、胸を壓せられて、ぼんやりとなつてゐたわたしは、さうした三浦さんの言葉を、聞くともなくおぼろげにききながら歩きました。

「やア浦部さん、余程考へてゐますね、いや逃げた魚は大きいとか申しますが、全く死んだ者に對する愛は、その人が生きてゐる時より尙一層つよいものかも知れませんね。」

三浦さんは獨語のやうに言ひながら、ことごとく、木履の音を寂しく響かせて歩いてゐられました。わたしは何とも言はず、空間の影を趁ふやうな心になつてだまつて歩いて行きました。薄紫に煙つた野末の山の端にしづかに沈みかけた夕陽が、地平線上に眞黒く森の影を描き出して、廣野一面に爛れたやうな、まつ赤な光を漲らしてゐました。

六

わたしは、かうしてここまで追想してきますと、ただ一途にわたしを苦しめやうとした、今までの惱みと異つたなやましさを、胸苦しいまでに感じます。それはもうわたしの心を鋭い恐怖の刃で突き刺さうとするものでもなければ、悔悟の鞭を以て打擲しやうとするものでもありません。けれども、何故か

わたしは現在自分の身邊を取圍んでゐる惱みより、耐へがたいはかなさとかなしみを感受せずにはゐられませんが、夫は、手をさしのべて捕へんとした物が、わたし自身の力の不足と、その場合身に降りかゝつた運命の支配とに依つてつい捕ふことを得ずそれが我身を遠ざかりゆくのを凝乎と眺めやつてゐるより外に術のないはかなさです。慕はしい物象を目前に凝視めて、自分が段々その方に近づきつゝある時ふとそれが消ね去つた跡の殘象を凝乎と眺めてゐるかなしみです。

このかなしみは、たゞそれだけで消ね去るやうな單純なものではなくて屹度、わたしの過去のあの怖ろしい行爲を追想せしめずにはをかないのです。わたしはこの追想より、どうとがして遁れやうと常にもがいてゐます。けれども、わたしの眼にこの寫眞が觸れる間は、わたしはどうしても、あの惱ましい過去を思出さずにはゐられない破目に陥つて了います。

わたしはそれを避けるため幾度かこの寫眞を破棄しやうと企てました。それは勿論、あなたを呪ふためでもなければ、あなたのおとりになつた道を悪むためでもありません。みんな、自分の過去の過まつた行爲を、これから追想するの不快を避け度いためでした。けれども、わたしは、全身の力を台紙を擱んだ兩手の指頭に集中して、破らんと企てる瞬間の心の緊張のうちに、生きものを生裂きにするやうな無氣味さを感じて、屹度躊躇せずにはゐられませんでした。

わたしはかうして、何時までも呪はしい過去の追想に惱まされながら、(凡ては自分が醸し出したのだ)といふやうな、はかない諦めの念を感じてゐるばかりなのです。